

書名：「待つ」ということ

著者：鷺田清一

出版社：角川学芸出版

出版年月：2006年8月

総ページ数：198ページ

ISBN：4047033960



推薦者

梅野圭史

鳴門教育大学大学院教授

生活・健康系コース(保健体育)

「待つことは難しい。」

これは、大正自由教育時代の体育教師であった大谷武一の言葉である。教師は、本来、善意の人である。愛しい子どもたちに、「こんなことを教えてやろう。」「あんなこともできるようにしてやろう。」といろいろ画策するのである。このように、「教師が待つこと」には、「期待」や「希（ねが）い」や「祈り」がある。

でも、子どもたちは、こちらが思っているようにはなかなか育ってはいくれない。その内、教師は「待ち」くたびれて、「焦れ（じれ）」てくる、「冷め（＝冷却の意味）」てくる。そして、子どもから「退く（＝退却の意味）」ようになり、「放棄（＝諦めの意味）」が生まれ、これに伴って教師の心も「空転」し、「膠着（こうちやく）」し、「閉鎖」してしまう。これが長く続くと、教師は「倦怠（＝だるいこと）」をおぼえ、「自壊（じかい）」する。これを防ぐのが、「是正」であり、「省察」である。こうした過程を踏んで、「開け（あけ＝ひらくこと）」が生まれてくる。

上記の括弧の中の言葉が、著書の目次である。

鷺田氏は、最後に「ようやく待つことなく、待つという姿勢を身につけるのかもしれない。」と締めくくっている。「待つ」という姿勢を見せずに、「待つ」ことができたとき、教師をやってて幸せだと感じるのであろう。

私は、今年で還暦を迎える。「待つこと」ばかりの人生を歩んできたように思う。それでも、「もう、待たなくてもいいんだよ。」と誰かが囁いてくれるまで、待ち続けようと思う。

